

医師情報	年齢	40代	医歴	23年	
専門医資格	日本外科学会外科専門医・指導医、呼吸器外科専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医・指導医				
都道府県	東京都	所属	大学病院	症例数	350件以上

## ■前提

ご相談内容に関して回答いたします。

このレポートにて述べる内容は、ご提供いただいた情報のみを参照して回答するものという前提でお読みください。また、今後の治療方針等を主治医と相談・決定する際の参考としてご利用いただくことを目的として第三者の立場から作成するものであることも併せてご理解くださいませ。

## ■治療法の選択肢

殺傷性抗がん剤 ※EGFR 遺伝子変異陰性の為

## ■各治療法の特徴

化学物質を用いてがん細胞を死滅または抑制させる薬です。がん細胞だけでなく正常細胞も攻撃するため、副作用が起こる可能性も高いです。肺門リンパ節や右肺野への肺内転移巣確認、胸骨下端転移もある状態の為、手術では取り切ることができずこの方針が第一選択となります。長所はがんを殺傷する能力が非常に高いことです。一方、短所は副作用が起こる可能性です。脱毛などの外見変化に関わるもの、手足のしびれや痛みなど、日常生活行動に影響を及ぼすもの、骨髄抑制や肝機能障害など重症化すると命に関わるものがある為、主治医と慎重に進める必要があります。

## ■治療の形式

①初回は2週間程入院で様子を診るケースが多いです。その後は薬剤や状態に応じて通院も可能です。

## ■これまでの治療の効果についての考え方

使用されているプラチナ製剤での薬物療法により、転移確認されている中でも画像検査、腫瘍マーカー値の推移では比較的進行は抑えられております。今後はより副作用の強い薬剤の使用が予想されるため、注意が必要です。

## ■治療後の経過観察や対応方法の考え方・留意点

今後原発巣や転移先に痛みが出る場合があります。また、殺傷性抗がん剤による肺へのダメージにより、間質性肺炎を併発する可能性も否定できません。治療を迅速に行いつつ、都度体の変化は主治医にお伝えください。ALK 陽性肺がん（ALK 融合遺伝子という遺伝子異常が原因の肺がん）であれば、対象の分子標的薬などもありますので、ご確認ください。全ての治療や医療行為が回復へ繋がることを切に願っております。

医師情報	年齢	50代	医歴	30年	
専門医資格	日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医、日本臨床細胞学会細胞診専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本遺伝性腫瘍学会遺伝性腫瘍専門医				
都道府県	東京都	所属	大学病院	症例数	460件以上

## ■前提

ご相談内容に関して回答いたします。

このレポートにて述べる内容は、ご提供いただいた情報のみを参照して回答するものという前提でお読みください。また、今後の治療方針等を主治医と相談・決定する際の参考としてご利用いただくことを目的として第三者の立場から作成するものであることも併せてご理解くださいませ。

## ■治療法の選択肢

- ①摘出手術（全摘が必要、腫瘍が5cmの為部分切除は不可能）
- ②先に抗がん剤治療を行い、腫瘍が半分以下になれば部分切除可能

## ■各治療法の特徴

①腫瘍とその周囲に広がる乳管内病変を切除する必要があります。センチネルリンパ節生検を行い、センチネルリンパ節（乳房内からがん細胞が最初にたどりつくリンパ節）への転移が2mm以下である場合（微小転移）は腋窩リンパ節郭清の省略が可能です。2mmを超える転移であっても、腫瘍が大きくない、センチネルリンパ節転移が2個以下である、術後に放射線照射が予定されている、術後に適切な補助療法を行うといった条件を満たせば、腋窩リンパ節郭清の省略が可能ですので、ご確認ください。

長所は主要部分を物理的に摘出できることですが、乳房を全て摘出することは温存したいご意向の方には短所でもあります。

②乳房部分を少しでも温存したい場合の治療の流れです。抗がん剤治療は半年ほどかかり、その間に腫瘍が現在の5cmの半分以下になれば部分切除も可能です。

長所はご自身の乳房を部分的に温存することが可能なことです。短所は、抗がん剤治療が必ず期待通りの効果を出すとは限らないこと、抗がん剤治療の副作用により、半年間程はお仕事などを制限して治療に専念する必要があります。また、ルミナールAタイプかと想定されますので、その場合は乳がん化学療法で使用される抗がん剤が効く人は10%とされていますので、十分に検討する必要があります。

## ■治療の形式

- ①入院にて摘出手術を行います。
- ②初期は様子を診る為2週間程入院で行い、その後は薬剤や状況により通院で行う場合もございます。手術を行う際は入院となります。

## ■これまでの治療の効果についての考え方

未治療の為記載なし

## ■治療後の経過観察や対応方法の考え方・留意点

術後はホルモン剤、抗がん剤治療、放射線治療を行う可能性がございます。リンパ転移が確認されれば放射線治療や抗がん剤治療が必要になる可能性が高まります。現状ではルミナールAタイプかと推測されますが、Bタイプであれば抗がん剤治療を行う可能性は高くなります。生検結果によって変わる部分ですので、ご確認ください。